



フランク・S・クレスウェル著『ホッケー』（1890年） の解題と翻訳

秋元, 忍

(Citation)

身体行動研究, 4:47-55

(Issue Date)

2015

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81008907>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008907>



フランク・S・クレスウェル著『ホッケー』（1890年）の解題と翻訳 Frank S. Creswell's *Hockey* (1890): A Bibliographical Introduction and Translation

秋元 忍*
Shinobu AKIMOTO*

ABSTRACT : With the spread of hockey at the end of the nineteenth-century and the later expansion of the game in England, a number of hockey manuals were published. Unparalleled among them was Frank S. Creswell's *Hockey*, which was published in London in 1890 and revised three times before the 1909 edition. Therefore, the contents that were added or deleted in the revisions may reflect the characteristics of hockey's diffusion during that time. As a foundation for further historical research on changes in the contents of this manual, a bibliographical introduction and translation of the first 1890 edition was done for this study, and the results were as follows. This first edition was the first book in England to deal exclusively with hockey by a prominent official of the Hockey Association. Published as part of a practical and inexpensive sport series, 'The All England Series', it outlines the skills and tactics of the Association game. After the introduction, it deals with such aspects as ground rules, the umpire, play, the goalkeeper, backs, play without a goalkeeper, and forwards. A comparison with the later editions shows that this first edition was characterized as a manual of the Association game for male players.

1. はじめに

19世紀末以降のイングランドにおけるホッケーの普及は、ゲームの実践の拡充と共に、多数のホッケー書の出版を伴った。表1は、1914年以前のイングランドにおいて、ホッケーのみをその内容として出版された著書を列記したものである。中でも、フランク・S・クレスウェル著『ホッケー』（表中下線部）は、以下の点で注目される。第1に、本書初版は、ホッケーのみを扱ったイングランド最初の単著であった。第2に、初版出版以降、1900年版、1906年版、1909年版において三度改訂され、出版が継続された、他に例を見ない著書であった。よって本書の改定時に追記、削除されるべきと考えられた内容は、同時期のホッケー普及の特徴を反映している可能性がある。先行研究においては、ホッケー関連書誌に関する成果の蓄積があるものの¹⁾、個別のホッケー書の記述内容の変化やその意味については検討されていない。以上から、本研究は、本書初版から1909年版までの記述内容の変化からホッケーの普及過程の特徴を検討する研究のための基礎的作業として、同書初版の解題と翻訳を行うことを目的とした。ブリティッシュ・ライブラリー所蔵マイクロフィルム版の本書初版を、解題、翻訳の底本とした²⁾。

表1 1914年以前のホッケー書

年	著編者、タイトル
1890	<u>F. S. Creswell, <i>Hockey</i> (初版)</u>
1895	H. F. Battersby, <i>Hockey</i>
1899	J. N. Smith, P. A. Robson, <i>Hockey: Historical and Practical</i>
1900	F. de L. Solbe, <i>Hints on Hockey</i>
1900	<u>F. S. Creswell, <i>Hockey</i> (新版)</u>
1901	W. H. Pickering, <i>Hockey for Ladies</i>
1904	Edith Thompson, <i>Hockey as a Game for Women</i>
1905	S. Tebbutt, A. Tebbutt, <i>Dictionary of Hockey Rules</i>
1906	<u>F. S. Creswell, <i>Hockey</i> (改訂版)</u>
1907	H. L. Bourke (ed.), <i>Hockey for Men and Women</i>
1909	E. E. White, <i>The Complete Hockey Player</i>
1909	<u>F. S. Creswell, <i>Hockey</i> (再改訂版)</u>
1910	Eric H. Green, <i>Textbook of Hockey</i>
1912	Eric H. Green, E. E. White, <i>Hockey</i>

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究所准教授

2. 解題

以下、1)著者フランク・S・クレスウェルについて、2)出版の背景、3)章構成と概要の3点から、本書初版(1890年版、以下「初版」と表記する)の解題を行う。

2. 1. 著者フランク・S・クレスウェルについて

クレスウェルは、1886年に設立されたホッケーアソシエーションの名誉幹事兼会計を、設立後間もない1887/88年のシーズンから務めた。1888年のルールブックに掲載されたホッケーアソシエーション役員一覧(図1)³⁾の末尾には、同職担当者として、クレスウェルの名が記されている。初版の表紙(図2)⁴⁾の著者表記は「フランク・S・クレスウェル、ホッケーアソシエーション名誉幹事」となっている。

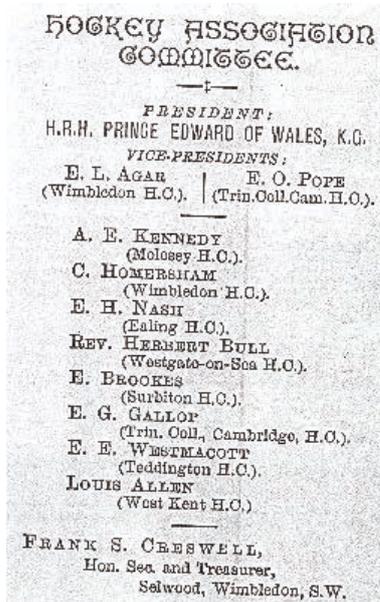


図1 ホッケーアソシエーション役員一覧(1888年)

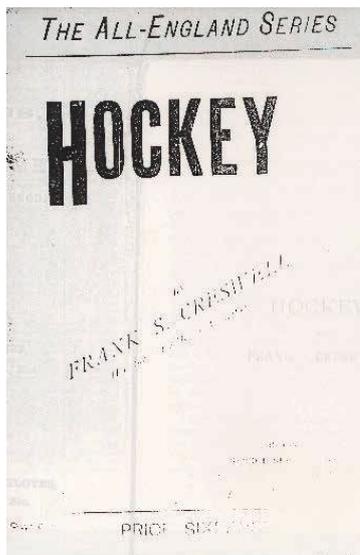


図2 初版表紙

図1に示した1888年のホッケーアソシエーション役員一覧には、名誉幹事兼会計への照会先として住所が併記されていることから、

クレスウェルがロンドン郊外のウィンブルドンに在住していたことが判明する。クレスウェルは、1886年のホッケーアソシエーション設立を主導したクラブの一つ、ウィンブルドンホッケークラブ(1883年設立)のメンバーであった。総合スポーツ新聞『フィールド』のマッチレポートから例を挙げれば、1885年12月に行われた対ケンブリッジ大学トリニティカレッジのゲームではハーフバックとして、また1886年1月の対モルジー戦では右のウイングとして、クレスウェルは出場している⁵⁾。

1890年には、クレスウェル直筆の署名入り書簡を用いた、スラゼンジャー社のホッケーボールの広告が、総合スポーツ雑誌『パスタタイム』に掲載された(図3)⁶⁾。彼は、同社の新しいボールを、ホッケーアソシエーションの名誉幹事という立場を明示して称賛している。「昨年の北部対南部の試合において御社が提供したボールは十分な満足をもたらしました。最良の白色皮革製ボールには確かな利点があります。15分もプレイすると新品の赤いクリケットボールのエナメルがほとんどはげてしまうことはよくありますが、御社のボールのエナメルは見事に残っています。」スラゼンジャー社は、当時のホッケーアソシエーション名誉幹事兼会計であったクレスウェルの発言の影響に期待して、彼の書簡を広告に用いたのであろう。

以上から、クレスウェルは、初版の出版時において、主要クラブのメンバーとしての経験を有する、ホッケー界において著名な統括組織関係者として、一定の影響を持つ人物であったと言える。

2. 2. 出版の背景

当時の出版情報誌によれば、初版は、1890年の7月後半に、ジョージ・ベル・アンド・サンズ社によるスポーツ叢書『オール・イングランド・シリーズ』の一卷として出版された⁷⁾。なぜこの時期に同叢書が出版され、ホッケー書が含まれることになったのかについては、同年8月に同社が出版した、アーネスト・ベル編『アスレチック・スポーツの手引き(*Handbook of Athletic Sports*)第1巻』(以下『手引き』と表記する)から考察可能である⁸⁾。『手引き』には、クリケット、ローンテニス、テニス、ラケット、ファイブズ、ゴルフ、ホッケーの各球技の概説が所収されているが、ホッケーの内容は、初版と全く同じのものであった。つまり、『手引き』の前書きにおいて、編者のベルが『オール・イングランド・シリーズ』というタイトルで同時に分冊出版されているものの別部門であると述べているように、『手引き』は、『オール・イングランド・シリーズ』の各巻を合冊したものであった。また、ベルは『手引き』出版の意図を以下のように説明しているが、これは初版の出版の背景として読み替えることができる。

「1つの有名な叢書を除くと(それは取り扱うテーマと価格の両方で、主にベテラン競技者と富裕層の読者に受けが良いものではあるが)、テーマとする価値のある手引きを提供する体系的な試みは、これまでのところ全く見られなかった。・・・簡易な形態で、各分野の権威と呼ぶにふさわしい卓越した著者たちによる各ゲームの明瞭な説明を、初心者と熟練プレイヤーの両者にとって有用なものとなるであろう実践的な指導、手引きと共に示すことを目的としている。」⁹⁾

ここでベルが指摘する「有名な叢書」とは、『オール・イングランド・シリーズ』に先行した『バドミントン・ライブラリー』を指し

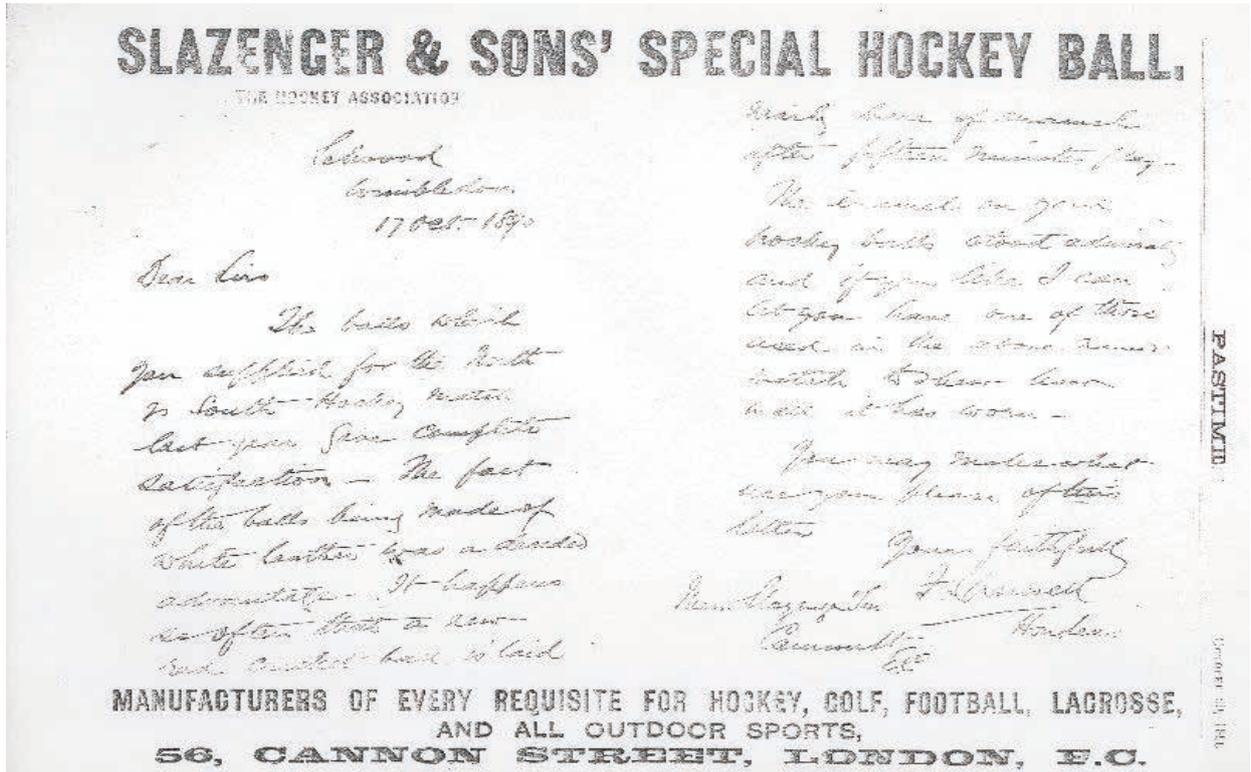


図3 スラゼンジャー社 ホッケーボール広告 (1890年)

ていると考えられる。1855年から刊行が開始された『バドミントン・ライブラリー』は、全33巻からなる総合スポーツ叢書であり、その顕著な特徴は「富裕層の読者に受けが良い」テーマと価格にあった。『オール・イングランド・シリーズ』は各巻1シリング(図4参照、ホッケーはさらに半額の6ペンス)であったのに対し、『バドミントン・ライブラリー』の価格は各巻10シリング6ペンスであり、両叢書の価格差は10倍を超えていた。

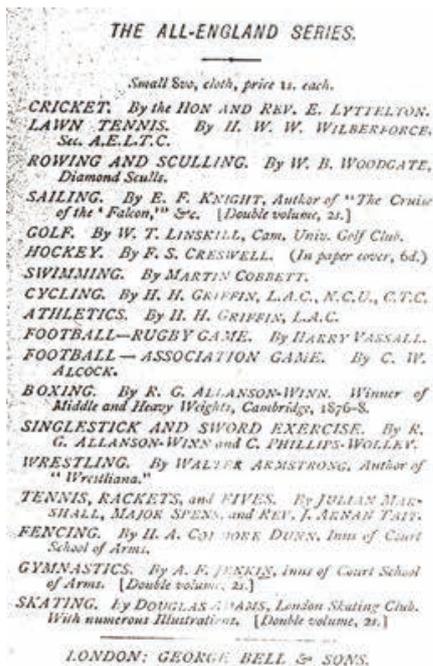


図4 初版に掲載された『オール・イングランド・シリーズ』広告

また『バドミントン・ライブラリー』にはホッケーが所収されていないが、同叢書の編者ワトソンは、その理由を以下のように述べている。「『ベースボール、ラクロス、ホッケー、その他球技』に関する本のアイデアを私たちは検討したが、十分に広い階級に訴えるものではないため却下した。」¹⁰ワトソンの説明に従えば、これらのスポーツをまとめた一巻は、富裕層のニーズに合致しないとみなされ、ついに『バドミントン・ライブラリー』として編まれることはなかった。これに対し、ニュースポーツとして普及しつつあったホッケーを自社の叢書に含めたベルの戦略は、明らかにワトソンとは異なっていた。ベルによる新たなスポーツ叢書と『手引き』の出版の背景には、成功を収めていた『バドミントン・ライブラリー』への明確な対抗意識があった。「小さな出版社はより安価な叢書を刊行した。・・・ジョージ・ベル・アンド・サンズは1890年より4巻からなる『アスレチック・スポーツの手引き』を刊行したが、熱意も財布も限られた人たちのために、彼らはまたそれを1冊1シリングの17冊の分冊として手に入るようにした。アフラロ(F. G. Aflalo, *Encyclopaedia of Sport*の編者：秋元註)とワトソンがジェントリーと上層中流階級に狙いを付けていたとすれば、これらのより小さな叢書は、事務員とその仲間たちに向けられたものであった」¹¹とローソンが指摘するように、初版は、広範なスポーツブームに対応した出版社による、廉価で実践的な叢書の一巻であったと言える。

2. 3. 章構成と概要

広告を除くと、初版の本文は全18ページであった。写真は含まれず、「グラウンドの区画」が唯一の掲載図であった。後年の各改訂版との章構成、ページ数の比較(表2)から、簡潔な技術解説書と

しての初版の特徴が明らかであろう。

表 2 初版から 1909 年版までの章構成とページ数

1890年版(初版)		1900年版(新版)		1906年版(改訂版)		1909年版(再改訂版)	
序	3	序	1	序	1	序	1
グラウンド	6	グラウンド	4	グラウンド	4	グラウンド	4
ルール	8	個人装具	8	個人装具	8	個人装具	8
アンパイア	9	連係プレイ	10	連係プレイ	10	連係プレイ	10
プレイ	9	プレイに関する注意	12	プレイに関する注意	12	プレイに関する注意	12
ゴールキーパー	12	ゴールキーパー	21	ゴールキーパー	21	ゴールキーパー	21
バック	14	バック	25	バック	25	バック	25
ゴールキーパーなしのプレイ	16	ハーフ・バック	27	ハーフ・バック	27	ハーフ・バック	26
フォワード	17	フォワード	30	フォワード	30	フォワード	30
連係プレイ	18	インサイドレフト	34	インサイドレフト	34	インサイドレフト	34
		アウトサイドレフト	36	アウトサイドレフト	36	アウトサイドレフト	36
		インサイドライト	38	インサイドライト	38	インサイドライト	38
		アウトサイドライト	40	アウトサイドライト	40	アウトサイドライト	40
		アンパイア	41	アンパイア	41	アンパイア	41
		ゴールキーパーなしのプレイ	43	ゴールキーパーなしのプレイ	43	ゴールキーパーなしのプレイ	43
		女性のホッケー	45	女性のホッケー	45	女性のホッケー	45
		ゲームのルール	49	ゲームのルール	49	ルール	49

初版は、序、グラウンド、ルール、アンパイア、プレイ、ゴールキーパー、バック、ゴールキーパーなしのプレイ、フォワード、連係プレイの計 10 章から構成されていた。

「序」において、著者 クレスウェルは、「何らかの日々の職を持っている人々」「たったの 2、3 日でも働けなくなったらビジネスに支障をきたす」人々をホッケープレイヤーと見なしていた。想定された読者層も、おそらく同様に、中流階級の人々であったと見てよいだろう。続いて一般的なゲームの特徴について概説されているが、その内容はアソシエーション・ゲームに限定され、当時知られていたもう一つのホッケーの様式、ユニオン・ゲームについては言及が見られない。ユニオン・ゲームとは、アソシエーション・ゲームに反対する一派が、プリストル周辺を拠点として 1887 年に組織化したゲームの様式であり、1895 年のナショナルホッケーユニオン解散に至るまで、イングランドには、2 つの異なる組織化された男性のホッケーのゲームが併存していた¹²⁾。初版におけるホッケーとは、クレスウェルが役員を務めるホッケーアソシエーションのゲームを専ら意味していた。

以下、グラウンドの区画法、ルールブックの入手法、アンパイアのあり方、プレイの進め方、プレイヤーの配置法、各ポジション論、流行の連係プレイの説明等、アソシエーション・ゲームに関する各事項について、プレイヤーとしての、またホッケーアソシエーション役員としてのクレスウェルの経験に基づく解説が続いている。装具や女性のゲームに関する説明は、初版にはまだ記述がみられない。初版は、男性向けの、著名な統括組織関係者による、アソシエーション・ゲームの概説書であった。

3. 翻訳

以上の解題に続いて、初版本文の全訳を以下に示す。

序

近年流行してきた多くの人気のあるゲームの中で、ホッケーはその一番手にあるとすることができる。おそらく過去 30 年の間に学

校へ通った経験のあるものなら誰もが証明できるように、それは新しいゲームではない。だがいにしへの男子生徒のホッケーは、現在のゲームの先祖ではあっても、アソシエーションルールによって行われている今日のゲームとは相当異なる。敵がたまたま不正な側(The wrong side)に入ってくる度に、スティックでその敵のすね(shin)を殴打する絶対的な選択権がプレイヤーに残されていたとしたら(長い間シニング shinning として知られていた行為)、それはほとんどの人がその現実や結果を直視しようとしたがらないひどい折檻の手段となっていただろう。大体ホッケープレイヤーは忙しい人であり、何らかの日々の職を持っている人々である。そのような人々にとって、たったの 2、3 日でも働けなくなったらビジネスに支障をきたすので、事故はなおさら深刻である。それゆえ、もしホッケーの最良の点が奪われないなら、ゲームがより安全なものになればそれだけ人気を得るのは当然である。おそらくゲームを安全なものにするのは簡単だろうが、安全性が確保された後には、オリジナル・ゲームが台無しになりはしないか、ということが問題となる。例えばホッケーの場合なら、中空のゴムボールと、正規のスティックの代わりに軽い歩行用ステッキ(cane)を使うことにしよう。安全にはなるだろうが、ゲームはどうだろうか。

しかしこの安全性の問題はとても重要であり、ここ 2、3 シーズンの間、現存する危険な側面の助長を除去しようとする努力と同時にそれを訂正していこうとするホッケーアソシエーションの委員の頭は、この点でひどくいっぱいだった。皆が知っているように、経験の増加にともなって新たな発展が起こるのは多くのニューゲームの常である。これらの新たな発展は、時には少しも望ましいものではないこともあり、もしそうであった時にはそれをチェックすることが正式に承認された当局の責任であり、そうすべきである。ホッケーも例外ではなく、既にある、もしくははまだ助長されている危険な要素に関しては、今後続く数年間のうちにホッケーアソシエーションは望ましからぬ発展のチェックと既にある欠点の訂正についての一連の仕事を行うであろうと考えてよい。

我が国がイングランドの屋外スポーツとゲームに関して広く認められているように、ちょっと危険なところがなければ真のすばらしいゲームをすることはできない、ということを確認するといえ、それでも危険が本来のゲームを損なうことなく避けられ得る時には、そうしないことはばかげており、同時に無益なことである。したがって、いまだにホッケーは言ってみれば揺籃期にあるのだから、そのゲームに興味を持つものは皆、よって立つルールの慎重な検討によってゲームのおもしろさを進展させるようベストを尽くすべきである、と私は主張する。そしてもし提案があれば、それをアソシエーションに諮るべきである。彼らは喜んで聞き入れるだろう。

危険という問題とともに、私は最悪の、そして示唆に富むアクシデントの事例のひとつを述べねばならない。これはボールを打つ際に、スティックを肩より上にあげたり振り回したりすることなど意に介さないことである。これはルール上禁止されている。しかし、多くは故意ではないにせよ、それでもルールはあまりに多く破られている。この点は後に触れるが、これを機に、厳密に「肩より上にスティックをあげない」ことに関してではなく、「スティック」に関してアピールされた時にアンパイアに制止される危険を冒すことなく、ハードヒットしたときと同じくらいの強打を得ることをスト

ライカーに可能にするために行われるロング・モウイング(long mowing)やサイス・スウィーピング(scythe sweeping)にいくつかの注意を促したい。このモウイング・ストロークは、選手達がこれを洗練すべく練習しているにせよ、強く非難されるべき新技術である。このストロークは全く勧められるものではない。そしてそこには非難されるべき多くのものを持ちあわせている。このやり方でボールを打つときには決まった傾向が見られる。空中にあがる「スクープ」になり、事故への危険が増大する。ここでフォワードプレイヤーがボールのすぐそばにいるのを想像しよう。その時敵側のハーフバックと向かい合い、そのプレイヤーは述べたばかりのこのやり方でストロークした。よってボールが浮いた。もしボールがフォワードプレイヤーの顔や頭めがけてまっすぐ飛んできたら、ひどいアクシデントから彼を救う方法は何もない。特に、多分先述のプレイヤーは猛烈なラッシュの終わりに飛ばされてしまうから、ボールが跳ね返ってくる速さからして、ひらりと身をかわしたり、よけたりすることはできないのである。

ここまで、やや長々とゲームの危険について述べてきたが、それは必要ないと思う人もいるかもしれない。だが、まず最も危険な特徴のいくつかを載せたので、私はそこに優しげな魅力を差し挟もうとするいかなる意向からも免れたらう。私は、私の意見に最後までついてきてくれるかを初心者に問わねばならない。もしホッケーが気に入られなければ、私にいくつかのゲームのプレイの仕方を紹介させてほしい。3つもあればお気に入りを見つけるのには十分であろう。その若いプレイヤーが十分熱中しないようであれば、彼にあきらめてもらい、他のより優しい娯楽へ転向させよう。というのは、彼をホッケープレイヤーにすることはできないからである。もう少し先輩の初心者の場合には、彼がゲームについて疑問を持っているのなら、私は彼をさそうのは気が進まない。彼は結婚しているかもしれないし、彼が暴力的なゲームに参加すべきではない多くの、納得のいくわけがあるのかもしれない。もし身体が健全な人であれば、挑戦してみて、それから自分で判断するようにとだけ言うべきであろう。

クリケット、フットボール、ローンテニス、その他活発さと正確さが必要なゲームに慣れている人なら誰でもホッケーを始めることができる。それはクリケットに必要な目の正確さと、フットボールに要求される持久力と勇気を兼ね備えている。クリケットのように、目がよいことが多くの有利さをもたらすだろうが、さらに付け加えてよいのは、よい目の所有者は自信過剰になり、自ら大失敗に陥るのである。この点は後に詳述しよう。

フットボールのように、バックスの選手の落ち着きと決断は、持久力、勇気と同様に必要とされるものであり、根気強い忍耐力は、フォワードに要求される。

グラウンド：

ホッケーグラウンドは平坦でなめらかであれば、それに越したことはない。平坦であればあるほど良いのだ。もし得られるなら、すばらしいクリケットグラウンドはその目的に見事に適している。不幸にも常にこうしたグラウンドが見つかるわけではなく、もし見つかった時でも、ホッケーはあまりにもグラウンドを深く傷つけ、来るクリケットシーズンが台無しになってしまうという理由から、そこ

でのホッケーを認めないという反論が持ち上がるかもしれない。しかし、大体においては、もしプレイが春に入ってからずっと行われるのでなければ、そこでプレイされる1シーズンのホッケーは実質上クリケットのグラウンドを悪化させることはないし、芝がまだ柔らかくふわふわしている間、それが通常の状態になってしまうのをホッケーは防いでいる、と私は考えたい。

グラウンドの大きさは以下のものでなければならない。

縦 100 ヤード

横 50 ヤード以上 60 ヤード以下

フットボールと同様に、ポストによって区画される。ゴールポストは幅 12 フィート、高さ 7 フィートであり、両ポストの最上部にバーを渡す。各ゴール (GG) の正面から 15 ヤードの地点に、ゴールラインと平行な 12 フィートの白線を引く。この線 (EE) の両端からゴールライン (D) に向けて 1/4 円を引く。各 1/4 円はゴールポスト (G) を中心とする。この曲線をストライキングサークルとする。

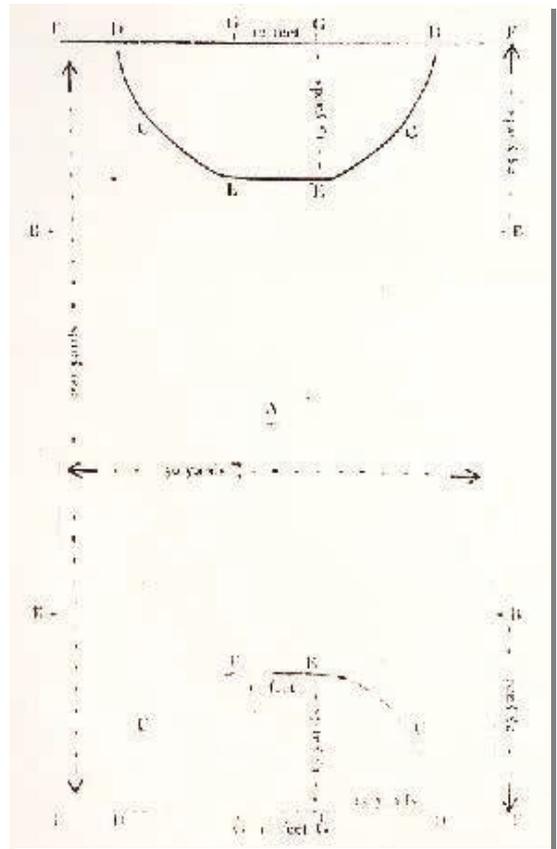


図5 初版に掲載されたグラウンド図

ルール：

ルールの全項目は、ストランド 346、『フィールド』のオフィスにあるホッケーアソシエーション当局によって出版されたルールブックに掲載されており、著作権があるので、ここでそれを侵害するつもりはない。その小さなルールブックは各シーズンの始め (10月初め頃) に出版され、前シーズンの終わりにアソシエーションの議事を通して新ルールや、旧ルールに対する変更箇所がすべて掲載されている。各クラブの幹事が一部、もしくはそれ以上のコピーを用

意しているだろうが、それは送料無料、計6ペンスという程々の値段で購入できる。

アンパイア :

可能なら、すべての試合においてアンパイアは2人いて、各サイドに1人ずつ置かれるべきである。偶然にもアンパイアが1人しかいないことがよくあるが、その職務は重要なので、やはり割り当てられるのがよりよいやり方である。両アンパイアはゲームの完全な知識を持つべきであり、またアピールがあった時には機敏で素早い決定ができるよう備えているべきである。先日のホッケーアソシエーション特別委員会(1890年4月)を通過したルール19への追加により、各アンパイアはグラウンドの半分を占め、半分だけに判定を下すことが決定された。グラウンドは、グラウンド中央を通過してサイドラインと直角な線によって分割される。アンパイアはハーフタイムに交換されることはなく、ゲームを通して同じサイドの判定を続ける。これはレフェリーの必要性をかなり小さなものにするが、レフェリーが任命されている時は、重要な試合が行われるときはそうされるであろうが、彼の決定が最終的なものとなる。便利な小冊子『アンパイア、レフェリーの手引き』は、ホッケーアソシエーションによって承認され、9月のルールブックに載ることになっている。

プレイ :

ホッケーのゲームにおけるプレイの本質について言われていることは多い。敵側プレイヤーに対する考え方は、ゲームがはじめて衆目に知られるところとなって以来著しく変化し、さらに言うなら、いまもいろいろ変化しているが、個々の各プレイヤーのポジションと義務に関して妥当なくつかの見解があると私は考えている。

各サイドは11人のプレイヤーからなる。

プレイヤーは以下のように位置する。

ゴールキーパー :

スリークォーターバック : 通常2人で第2列目のディフェンスと呼ばれる。

ハーフバック : もしくは第1列目のディフェンスは、その数は3人で、1人は中央に他の者は各サイドに位置する。

フォワード : 5人。1人は中央に、そして各サイドに2人ずつ、ハーフバックの前方に配置される。

それぞれのサイドのキャプテンがゴール選択のトスをし、「ブリー」によってゲームは開始される。ボールは中心のマーク(A)に置く。各サイドのセンターフォワードはボールと自陣ゴールラインとの間に立ち、グラウンドと敵のスティックとを交互に3回打ちあわせ、その後ボールはインプレイとなる。どちらかが直ちにヒットしてもかまわない。

ボールがインプレイになったら、各サイドのフォワードはドリブルとパスによってボールを敵のストライキングサークルに持ち込み、可能なら得点を入れようと全力を尽くす。

「ブリー」が生じた時は、各プレイヤーは自陣ゴールラインとボールとの間に位置せねばならない。

攻撃側のプレイヤーによってボールがゴールラインより後方に出された時は、ボールはデッドであり、ボールがゴールラインを割つ

た地点から前方に25ヤード以内に置かれ、「ブリー」によって再開される。

守備側のプレイヤーによってボールがゴールラインより後方に出された時、もしくは攻撃側のプレイヤーの1人によって打たれたボールがゴールラインを超えるか、守備側のプレイヤーやスティックをかすめてボールが出た場合には、「コーナーヒット」が要求される。

「コーナー」が認められた時、ディフェンス側はすべて自陣ゴールラインより後ろにさがり、オフense側はストライキングサークルより外側に位置しなければならない。全員がこの位置に着いたら、ボールはコーナーの旗から1ヤード以内のある一地点から、攻撃側のあるプレイヤーによってヒットされる。どちら側でも、あるプレイヤー、または何名かのプレイヤーが鋭く、素早いストロークによってゴールポストの間にボールを打てるように、ストライキングサークルの外側の味方に向かって、ボールは下げられる。ボールがヒットされたら直ちに守備側はフォワードをラッシュし、冷静で堅実なゴールへのショットを攻撃側に打たせまいとするだろう。

ボールがヒットされるまでは、どちらのサイドもラッシュすることはできない。「ストライキングサークル」の内側で、攻撃側のプレイヤーによってヒットされたボール以外は、得点に数えられない。またたとえ守備側のスティックや人をボールがかすめたとしても、攻撃側のある選手がストライキングサークルの外側からヒットしたボールは得点に数えられない。

コーナーは得点として数えられない。

バックハンドのプレイ : プレイヤーは、スティックの背部や丸みを帯びた部分でボールを打ったり止めたりしてはならない。これに背いているプレイヤーは敵から「バックハンダー」を要求される責を負い、そのペナルティーは敵側のフリーヒットである。

「フリーヒット」が認められた場合、ヒットが行われる地点から5ヤード以内に反則を起こした側のプレイヤーは入ってはならない。フリーヒットはルール違反が起きた地点、すなわちペナルティーが要求された地点で行われる(ルール参照)。

サイドライン(BB)をボールが越えたときは、デッドである。ボールを出した側と逆のサイドのあるプレイヤーによってロールインされねばならない。前方を除くすべての方向にロールインすることができる。ボールが境界線から5ヤード離れるまで、プレイヤーはそれをヒットすることはできない。

オフサイド ; 味方のあるプレイヤーによって、あるプレイヤーへボールがヒットされた時に、彼がボールより前方に位置し、またボールがヒットされた瞬間に彼と敵側ゴールラインとの間に3人の敵側プレイヤーがいなければ、彼はオフサイドとなる。彼は他のプレイヤーによってボールがヒットされるまで、それに触れてはならない。ペナルティーはフリーヒットである。

通常のゲームの時間は1時間10分である。ハーフタイム時にゴールは交換される。

ゴールキーパー :

まずゴールキーパーを探り上げることにしよう。完全にではなくとも、すべてのプレイヤーの中で最も責任が重いのは彼であると言っても良いということは、皆の認めるところであるから。

寒々とした冬らしい午後、頑丈な後見人が震えているのを見た

ことがないだろうか？ 彼はゴールへの速いショットを止めて邪魔する瞬間を待ちながら、彼の持ち場もしくは「ゴールポストの間」に、静かに立っているのである。ラッキーなキーパーは、ショットを止めるのに成功し、冷静に、そして的確にボールをうまくヒットし、ストライキングサークルの外に、またグラウンドのもう一方の側にボールを出す。そこには彼の味方のウイングがボールを取ろうと待ちかまえており、味方の他の選手にパスをする。今度は彼が敵側ゴールを脅かすことができるのだ！もしそのゴールキーパーがその攻撃にうまく立ち向かうことができたなら、彼は自分の任務を果たしたという自意識と共にそれまでのポジションへ戻ることができる。おそらく彼は他の攻撃をかかわすために、すぐに必要とされる。そして先の成功にまだ照らされたまま、彼はそれを自信満々に待っているのだ。しかし悲しいかな！ 今度は、ボールは前とちょうど同じ程度に強く打たれたが、運命は彼に逆らった。ボールは彼のリーチのちょっと外側を、彼の指をかすめて、彼とゴールポストの間に放たれる。「どうして俺はもっとこっちに立っていなかったんだ？」彼は嫌気がさしながらぶつぶつと独り言を言う。気にするな、友よ、君はそれをセーブできなかった。君はゴールの真ん中にうまく、十分適当に立っていた。それで幸運な、すばらしいシュートが飛んできた。ボールのコースにちゃんと立っていたって、誰もあんなシュートを止められやしない。

そうなのだ。チャンスはたいてい感謝されるか罵られるかのどちらかである。ゴールキーパーが「気をつけ」の姿勢の戦士のように両足を締めて立ったまま、ゴールポスト間にうまく、真っ直ぐに飛んできたショットに次ぐショットが、ちょうど彼の足に命中しているのを見たことはないだろうか。ゴールキーパーは密かに自分はよくやったと自負するし、彼を非難しようなどという気持ちは私には少しもない。しかし、もし彼がちょうどそこに立っていなかったとしたら、その時はどうだろうか。

確かに、どこに立つべきかを知ることについては多くの意見があって、経験あるゴールキーパーはその地点を見出しているだろうし、初心者はそうではないだろう。この理由から、「運」や「チャンス」について、多くを語るのはあさはかなことなのだ。こうした要素は人生の多くの点についても存在する。ちょっと考えてみよう。最高のやり方は、できるときには運命の女神に逆らうことであり、彼女の機先を制することだ。

ゴールキーパーに関する意見は終わりにしよう。彼は冷静で、安定した人であり、些細なことでは簡単に取り乱さない人であるべきだ。彼は、ひどい瞬間がやってきても鋭く、機敏であり、何にも邪魔されずに意図的なゴールへのショットを打ってくるサークルの中の敵に備えるのだ。

同時に、彼は忍耐強くなければならず、前進してくる敵に対して「留まる」のか、それとも「出ていく」のか、正確に判断しなければならぬ。そうした状況下において彼がいつ、そしていかに行動すればよいのかを文章にすることは時間の無駄であろう。（コピー不鮮明のため以下一文不明：秋元註）

バック：

おそらく、ホッケーのゲームにおける「バック」の配置に関しては、フィールドのその他の場所以上に多くの変化があった。

元来、ゲームが揺籃期にあった時には、守備的な目的のためには1人、多くて2人のバックで十分だと考えられていた。今日では、多くの変化を経て、主導的なクラブの多くは以下のフォーメーションでプレイを行っている。スリークォーターバックの2人は、ストライキングサークルの境のちょうど線上、またはそのあたりに、各サイドに1人ずつ配置される。または、もしその状況が来たら敵をオフサイドに陥れられるように、他の1人の前に1人配置するのが賢明なことが多い。

スリークォーターバックは、ゴールキーパーに次いで、大きな責任が課せられている。「ゴールキーパーの次に」と言ったが、（それはスリークォーターバックの持ち場が、それ以上に神経質な場所ではないかどうかという問題である。）この理由として、大体彼には失敗を挽回する時間はないし、さらにゴールキーパーであれば正当化されるかもしれない失敗を彼が弁解することはほとんどできないのだ。あるスリークォーターバックがもう1人の前方でプレイしている時には、自陣ゴールに近い位置にいるもう1人は、ストライキングサークルより前方には行くべきではない。これは彼の普遍の原理とするべきである。彼は、自分が守備の最終ラインであり、また自分がゴールキーパーの前になければ実質的に役に立たないのだということを忘れてはならない。

もちろんスリークォーターバックが適宜に計らい、攻撃を止めに前進せねばならない時もあるが、彼には裁量を誤用していないか常に用心させなさい。

3人のハーフバックは、スリークォーターバックの前に置かれ、フォワードをうまく見ながら前に進められる。各サイドに1人ずつ、もう1人は中央に位置する。通常センターは他の2人よりわずかに前方に位置し、実質的には中央のフォワードのプレイヤーのサポート役を演ずる。ずっとこうしてきたのだが、私が思うに、最近の経験では、全体としては中央のハーフバックはもっと前方でプレイした方がうまく行くと言えるかもしれない。他の2人のハーフバックは中央のセンターバックほど前方に位置している必要はないが、それでもなお、うまくついていって、はっきりとサポート役を演じられるように十分味方フォワードの近くでフォローしなければならぬ。

うまく前方でハーフバックがプレイすることの有利な点として、2つの要素がある。ボールが彼らに向かって転がされた時、また味方のフォワードがミスをした場合でも、彼らがボールを素早く止め、取り返すことができる。他には、1、2人の敵のフォワードがボールをクリアする機会を得る前に、賢明なコンビネーションの力で、うまくグラウンドを走ってゴールを脅かすこともできる。そして第2には、1人、またはその他のハーフバックの間または背後に賢明にボールがパスされた場合、直ちに後方へ走って、ゴールキーパーの前の守備の最終ライン、すなわちスリークォーターバックに敵が到着する前にその侵略者を迎え撃とうと努力するか、または先に示した彼ら（スリークォーターバック）を支援することによって、その不幸を回復できる十分な時間が得られる。攻撃側が得点を確認した時にも、こうして多くのゴールが防がれてきたのである。

要するに、ハーフバックの第一の義務は「前方にフィード」することである。もしこれが無視されることがもっと少なくなれば、「ハードヒッティング」に関する不満を聞くことも少なくなるだろう。

攻撃を跳ね返すにあたって、ハーフバックとスリークォーターバックの両者は、たとえ速いボールであっても、常に足、脚、手でそれを止め、敵のクォーターか、より良くは味方のフォワードの1人に、迅速にそして素早くそれをリターンするべきである。「良い眼をしている」プレイヤーの多くは、ボールが彼に向かって飛んできた時、速く動いているボールを打つ誘惑にかられる。しかしそれは不安的な行為であり、強く非難されるべきものである。

ハーフバックであれば自分の責任でそうすることがあるかもしれないが、スリークォーターバックがそうすることはない。

バックの両部門のプレイヤーに適用可能なボールのヒッティング方法に関するある言葉をここに加えることができる。先述した危険な行為であるボールの「スクーピング」について述べる。それをやるプレイヤー達は、彼らはフォワードのプレイヤーにボールをリターンすることを求められているのであって、可能な限りの最大の力で敵のクォーターにボールを送ることではないということを見逃しているか、忘れてしまっているように思われる。これが行われたときには、普通ボールは敵側バックスの1人によって再び同じように強く打ち返され、明らかにその結果、フィールド全体がしばらくの間代表的なバックスによるヒット力の競い合いのたんなる観察者になる。プレイヤーと観客両者にとってその行為にともなう危険は一切ないと言うことなど、さらにばかげたことで、私には想像することもできない。強く鋭いストロークこそが必要なすべてであるということをおバックに覚えさせよう。先に述べたことの成果をすぐに見ることができれば、ホッケーのゲームはより素晴らしい、人気あるものになるだろう。

ゴールキーパーなしでのプレイ :

ゴールキーパーなしでのプレイは、前シーズン (1889/90 年)、モルシーほかの主導的クラブによって成功裏に試行されている。通常はゴールキーパーの替わりに2人のスリークォーターバックがゴールを守る責任を持つ。敵に激しく攻められたときには、彼らの1人がゴールに下がり、その間もう1人が前に出て敵のショットを防ぐとするのである。

このシステムは、第1に、敵がオフサイドにならずにボールよりずっと前に進むことが難しいという利点がある。一方不利な点もある。通例どのシステムが最高か、ということについてはっきりした意見を思い切って述べることはなくても、前シーズン中の主要な試合でこの新たなフォーメーションが試行された時には、いつもそれが成功していたとは言えると思う。ただし各例において、2人のスリークォーターバックが最高であったことを忘れてはならない。ゆえに、2人のスリークォーターバックを完全に信頼できる時にそれは利点となり、そうでない時にはならないと言える。

フォワード :

フォワードのプレイヤーに関して私が言わねばならないことは、彼らの運命に降りかかる作業量と逆の比をなしている。

手短かに言えば、彼らはゲームの中心人物である。必要とされる資格は、コンディション、勇気、落ち着き、そして「ショット」の幸せな瞬間が来たときの冷静さと正確さを持っていることである。

フォワードの任務は単純だが同時に最も困難であり、必要な資格

を最もうまく言い表すのは「勇気」である。

フォワードはセンター、ライトウイング、レフトウイングの3部門に分かれる。最近採用されたフォーメーションでは、センターには1人、両ウイングには2人を配している。すべてのフォワードは足が速くなければならないし、ボールが彼らへ「ボグリング (遅い球)」や遅延なくパスされた時はそれを即座に、正確に扱うべきである。いつでも彼らは各自の場所において、常にボールを味方の1人にパスするつもりでいるべきである。これを守ることを怠ると、おそらく他の欠点以上に試合の敗北に大きく影響する。あるプレイヤーが味方のもう1人がいるべき場所にボールをうまくパスするが、そのプレイヤーが適切なポジションにおらず、それ故彼にボールが渡らないとわかることほどひどいことはない。それはチームを混乱させ、キャプテンを悩ませる。

連係プレイ :

2シーズン前までのホッケーはもっぱらドリブリング・ゲームであった。偶然ボールを持ったプレイヤーは、それを相当長く、できる限り自分でキープし、味方のプレイヤーでパスをする連係など考えなかった。連係によるより科学的なプレイの方法をFAが採用する以前の、また覚えている人がいるだろう我がが学校時代のフットボールと、全く同じ様なものであった。しかし、過去2シーズンの間、望ましい変化がホッケーに起きた。連係ゲームが次第に知られるようになり、経験あるプレイヤーによる明確な改良としてそれが認められるようになっている。

多くのクラブは、いやすべてのクラブと言うべきであろうか、それを試しているが、あるべくしてそれがプレイされているところはまだ非常にわずかである。しかしこの傾向は正しい方向である。それは比較的新しい方法であり、人々がすぐにそれに飛び移り、卓越することを期待してはならない。時間がかかるのだ。だがそこに希望がある限り、結果は確かである。

キャプテンの義務と責任は、連係ゲームによって断然増加する。それは統率力のさらなる範囲を創造する。キャプテンは、味方のプレイヤー達を自分の場所につかせるよう、定期的に目を時計に向けねばならない。妥協はすべきではない。「ウイング」のプレイヤーには、うまくいきそうなチャンスがあるように見えるので、逆のウイングヘラッシュしようという誘惑が強いかもしれない。しかしこれはチェックされねばならない。この側面の曖昧さは多くの敗北の源であり、そうしたことをするオフenseにはすぐに注意すべきであり、そのオフenseは非難される。もしあるプレイヤーが過ちを犯し続けるなら、彼が服従を覚えるまでチームからははずすのが最も良い策である。彼は自分の過剰な熱意を守るため、多くの理由を主張するかもしれないが、「原則」は間違っている。フィールドの決まった場所にある人がいないかもしれない時に、その状況が決して起こらないと言うことに私は全く反対なのだが、そうした状況はそう頻繁に起こるものではない。経験あるプレイヤーがそうして誤りを犯した時、彼は味方に明確なアドヴァンテージをもたらすことに成功する。まあその次は、キャプテンが戦術的展開の成功を見越して、規律違反の彼を大目に見るかどうかにかかっている。「一事成れば万事成る」とはまったく真実であるが、その教義はあまり安全なものではない。

ホッケーについてのこれらの覚え書きを締めくくる前に、前シーズンの終わりに見られた提案、すなわちグラウンドから5フィート以上のボールはいかなる時もヒットされるべきではなく、その決定はアンパイアによる、ということに触れないわけにはいかない。さらに踏み込んで、グラウンドから2フィートをその限界として提案したプレイヤーもいた。これらの提案を力説する動機、すなわちゲームはできるだけ危険を少なくするというにはまったく同意する一方で、その疑問がもっと一般に議論され、実際のプレイにおいて試行されるまでは、私は明確な意見を形成するのを躊躇する。その提案を非難することには全く反対であり、もし十分にそれが実行に移されれば、それはゲームの明確な改良となるだろうと思う。同時に、何を取り消さねばならないかを直ちに知るために多くのことがなされるように、ルールの変更や新ルールを扱うときには、それがあまりに早計になり過ぎないように細心の注意を払う必要がある。

上述の提案に反対する主な議論は、アンパイアの手中にその様な多大な権力を与えることが不得策であり、それどころか、ボールのコースの高さに関する疑問が生じた時、多くの例においてアンパイアが正しい決定を与えることが不可能だということである。

しかしこれらの議論は、もうすぐ明らかになると私は思うが、合理的な解消が可能である。

最後に、プレイヤー自身が絶対的にルールに従い、さらには不文律のルールにも従わない限り、世界のいかなるルールも、ゲームをあるべき姿に、またそうなるはずの姿に維持することはない、と言えるだろう。常識がプレイヤーに教えずにはいないその不文律のルールは、ホッケーのゲームを、本当に優れたイングランドのゲームと同様に健康的で楽しいものにするのに不可欠なものだ。

4. おわりに

本稿では、フランク・S・クレスウェル著『ホッケー』（1890年）から再改訂版（1909年）までの記述内容の変化に関する研究の基礎的作業として、初版の解題と翻訳を試みた。結果、以下の点が明らかになった。第1に、初版は、ホッケーアソシエーションの著名な役員による、ホッケーのみを扱ったイングランド最初の著書であった。第2に、初版は、広範なスポーツブームに対応した出版社によって、廉価で実践的なスポーツ叢書の一巻として出版された。第3に、後年の改訂版との比較から、初版は、男性プレイヤー向けの、アソシエーション・ゲームの戦術、技術概説書として特徴付けられた。

次稿の課題として、以下の3点が挙げられる。第1に、初版以降の記述内容の変更、追加箇所の検討。第2に、各改訂版と同時代の他のホッケー書との記述内容の比較。第3に、初版以降の記述内容の変化と、20世紀初頭のイングランドにおけるホッケーの普及過程との関係性に関する検討。以上の観点から、20世紀初頭のイングランドにおけるホッケーの普及の意味を読み解いていくことにしたい。

註

1) 最も詳細なホッケー専門書誌として、以下を参照。W. A. Malhelbe, *Chronological Bibliography of Hockey*, Johannesburg, Johannesburg Public Library, 1965. また下記の Robson, Mirov

の著書もホッケー書誌を含んでいるが、遺漏が多い。
‘Bibliographical List to 1934’, Philip A. Robson, *A Manual of Hockey*, London, Methuen & Co., 1934, pp.126-144. ‘English Hockey Publication’, Nevill Mirov, *The History of Hockey*, Staines, Lifeline Ltd, 1986, pp.313-315.

2) F. S. Creswell, *Hockey*, London, G. Bell and Sons, 1890. 同書初版の現物については未見である。またマイクロフィルム版には判読不明箇所があるため、翻訳時にその箇所を注記した。

3) The Hockey Association, *Rules of the Game of Hockey, and the Hockey Association*, London, Horace Cox, 1888, n. p.

4) Creswell, *op. cit.*, n. p. (front page).

5) *The Field*, December 19, 1885, p.878, January 9, 1886, p.54. ワクリー (Wakley) によれば、クレスウェルは、ウィンブルドンホッケークラブと密接な関係にあったウィンブルドンクリケットクラブのメンバーとしても活躍したスポーツマンであった。B. J. Wakley, *The History of the Wimbledon Cricket Club 1854-1953*, Bournemouth, Sydenhams, 1954, p.36, p.39.

6) *Pastime*, October 29, 1890, n. p.

7) *The Publisher’s Circular*, August 1, 1890, p.925. 1890年7月16日から31日に出版された図書目録に、初版が含まれている。

8) Ernest Bell (ed), *Handbook of Athletic Sports. Volume I. Cricket, Lawn Tennis, Tennis, Rackets, Fives, Golf, Hockey*, London, George Bell and Sons, 1890.

9) The Editor, ‘Preface’, *ibid.*, pp.v-vi.

10) Alfred E. T. Watson, ‘The Badminton Library’, Hedley Peek (ed), *The Poetry of Sport*, London, Longman, Green, and Co., 1896, p.26.

11) John Lowerson, *Sport and the English Middle Classes*, Manchester, Manchester University Press, 1993, pp.255-256.

12) ユニオン・ゲームの展開と制度的消滅については、以下の拙稿を参照。秋元忍、「イングランドにおけるユニオン式ホッケー 1887-1895年」、『体育学研究』、第45巻第2号、2000年、pp.174-185。